

# そもそも意味の合成性は必要なのか？

高谷 遼平 (Ryohei TAKAYA)

慶應義塾大学

意味の合成性とは、以下の直感的な形式のもと語られるテーゼである。

合成性：表現の意味は、その表現に含まれる単純表現の意味と統語論的構成規則によって決定される

また、形式的には、統語論と意味論の準同型を述べる以下のような関数的定義が一般的である。ここで $\mu$ とは当該の意味論を表し、各表現の意味論的値を返す関数である。

*Funct*( $\mu$ )：すべての統語論的規則 $\sigma$ について、次のような意味論的操作 $\gamma_\sigma$ が存在する：

$$\mu(\sigma(e_1, \dots, e_n)) = \gamma_\sigma(\mu(e_1), \dots, \mu(e_n))$$

意味の合成性が、ほとんどすべての言語哲学者や意味論者にとって意味論構築の前提条件であったことは疑いようがない。事実、言語哲学における多くの問題は、自然言語の一見非合成的な振る舞いによって生じており、それらの問題を合成的に解決することが目指されてきた。すなわち、同一の現象に対する解決策として「合成的な説明」の方が「非合成的な説明」よりも優れていると考えられてきたのである（談話表示理論の登場後、その合成的な代替理論と自されたものが多く提案されたことを思い出されたい）。

しかしながら、このような背景に反して、なぜ合成的意味論が必要なのかに答えることは非常に困難である。「自然言語意味論として形式言語の意味論を援用しているのだから、合成性は必要である」という論が空虚なものなのは明らかだろう。また、合成性の論拠として挙げられる学習可能性、生産性、新規性、体系性からの論証は、いずれもひろく認められるにも関わらず、その内実が非常に曖昧なものであり、さらに合成性の必要性を決定づけるものではないと論じられる（cf. Pagin&Westerstahl (2010), “Compositionality II: Arguments and problems”）。結局のところ、自然言語意味論に合成性は必要か否かという問い自体に対する明確な答えは出ていないのが現状である。

そこで本発表では、合成性と計算可能性という類似的でありながら異なる概念を比較検討することで、合成性の必要性を再考したい。両者の比較が有益に思えるのは、「合成性」という名のもと語られる議論や規則が少なからず計算可能性に関するものであり、両者が混同されている場合が多いからである。合成性と計算可能性は、その形式的定義のもとでは独立であり、もしも（明示的な形で定義された）学習可能性論証等によって裏付けられるのが計算可能性のみならば、我々が合成的意味論の構築を目指す理由が失われる可能性がある。